

芥川龍之介の自殺直前のスキャンダルと、改竄された遺稿



人文学部
准教授 小谷 瑛輔

研究分野

Research area

日本文学

研究のキーワード > 日本近代文学

研究内容

Research content

「[題未定]」として全集に掲載された芥川龍之介の遺稿は、現存する芥川自筆原稿と比較してみると、いくつか異なっている点がある。発表者は、それらの異同や自筆原稿の分析を行った。そこからは、(1)芥川の知人による子殺し事件、(2)その知人と芥川との間にあった剽窃・代作問題、(3)芥川の自殺した義兄が起こした保険金詐欺自宅放火事件、という3つのスキャンダルを隠蔽するために、改竄されたことが分かってくる。

研究のポイント

Research point

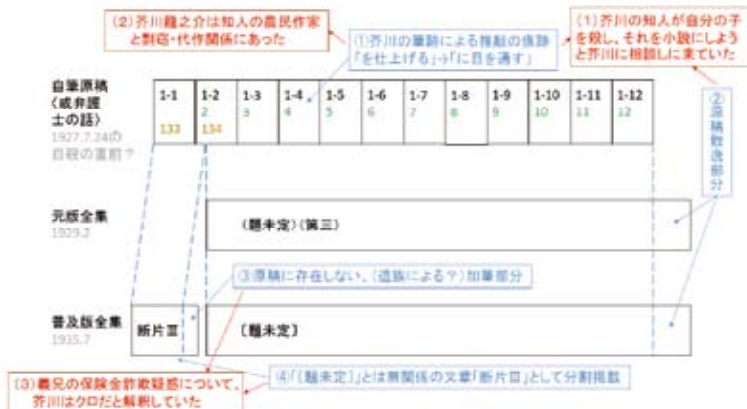
自殺を目にした芥川龍之介は、それらを自ら文章で発表して告白しようと試み、逡巡して推敲し、ついに未発表のまま自殺した。そうして残された遺稿は、遺族によって加筆や分割といった積極的な編集を加えられた上で、全集に少しずつ発表されていった。その奇妙な異同の事情はこれまで解明されずに来たが、自筆原稿に残されていたのは、自殺を前にした芥川龍之介の、スキャンダルの公表をめぐる逡巡を生々しく伝える痕跡であった。

研究への取組、今後の展望

発表者は2015年度、人文学部の中島淑恵教授をはじめ人間発達学部医学部などの教員に呼びかけて、富山大学が蔵書を所蔵するラフカディオ・ハーンの部局横断的な共同研究を初めて立ち上げた発起人である。また全国の研究者や将棋界の関係者と協力して「将棋と文学研究会」を主催して科研費を獲得している。さらに地域の研究者との連携によって富山の郷土文学を研究して富山県から「高志プロジェクト平成28年度優秀者」を認定されるなど、日本文学研究を軸としながら全学・地域・全国・国際と様々なレベルで横の広がりを持った文化研究の展開を開拓している。

主要な研究テーマは芥川龍之介の文学だが、国際芥川龍之介学会での定期的な研究交流などを基盤に、外国からの日本文化への関心を踏まえつつ、日本の純文学を代表するこの作家の文学におけるシンボルとしての機能を精緻に分析して、日本文学の文化的な価値の新たな展開を模索している。

研究REPORT



図中のスキャンダル(2)は死後十年以上のあいだ伏せられていた事実で、芥川が発表しようとしていたことを今初めて明らかにしたもの。

スキャンダル(1)(3)は原稿から判明する事実として発表者が初めて指摘したもの。いずれについても自殺を前にした芥川龍之介が、告白するかどうか逡巡していたことが原稿から確認できる。遺族によって隠蔽されていた、自殺直前の芥川龍之介が最後に原稿に託した苦悩が今回初めて明らかになった。